

## 鎌田敏夫「会いたい」の授業

白瀬 浩 司

一

二学期を迎えたばかりの生徒たちは、心身ともに何となく夏期休暇のペースと気分とをまだ引きずっている。いや、彼らのみならず、実際のところ、私もまた同様なのだが……。ともあれ、こちらがやつと日常のペースを取り戻す頃には、彼らの心は授業よりもむしろ学園祭（わが校では、例年、九月の第四日曜日に開催される）の方へ向けられ、クラス展示やクラブの催しの準備に忙しくなってくる。

私の担当科目のうち、高一普通科・国語Ⅰ「現代文」の授業時数は、四組・五組両クラスとも、学園祭まで七時限しかなかった。しかも学園祭前後の（準備や片付け、さらには翌々日の体育大会の実施や振替休日による）授業のブランクは一週間にも及ぶのである。

そんな時期に、生徒たちの落ち着かない雰囲気迎合することなく、

のみならず、彼らの関心を持続させつつ授業を展開していくことのできる教材として、いったい何を教室に投げ込むべきか。もちろん、このことは、学園祭の時期に限らず、また、たとえ教科書収載の教材をセレクトする場合であっても、不断に私たちの課題としてある。読む、ことや書く、ことの楽しさを知ってもらうこと、あるいは心揺さぶる作品との衝撃的な出会いを演出すること——シンプルだが、それが私たちの原点であり、責務でもあるはずだ。次に引くのは、この三月に卒業した生徒が、ちょうど高一の二学期に書いた感想文の一部（圈点||引用者）である。

ぼくはこのような国語の授業がはじめてです。こんな楽しい小説が授業に出てくるとは思いませんでした。国語といえど、こか勉強というふんいきのある文章を読んで、いって、それがテストに出るといふパターンなのでぼくは嫌いでした。でもぼく

はこの作品に興味があったので熱中して読むことができました。どこかの段階で所謂「国語嫌い」になってしまった生徒たちにとって、「国語の授業」とは「楽しい小説」と出会う時間などでは毛頭なく、「どこか勉強というふんいきのある文章」を読まされて、「それがテストに出るといふパターン」の繰り返し、ある種の苦行めいたものなのだろうか。長い学校生活の中で彼らがそのような馴らされてきているのだとすれば、そして「国語の授業」が読むことや書くことを嫌いにさせ、ひいては小説嫌いや文章嫌いを助長しているのだとすれば、私たちの日々の営みはいったい何なのだろうか。彼らを教育せねばとか、所謂「国語力」をつけさせねばとかいう職業意識（教員根性？）の呪縛によって、私たちの側までが読む、楽しさを何処かに置き忘れてしまっているのなら、これほど不幸な国語教室はあるまい。

また、「共通教材・共通問題」ということを声高に主張する教師がいる。彼らにしてみれば、おそらく、

教材は、教科書教材であることが自明のこととされている。教科書教材であれば、かならず教師用の指導書がある。指導書にそって授業をやれば、ほぼ同じような結果が出てくること期待できる。生徒の方も、立ち止まって考えたり、悩んだりすることもない。教師の板書をひたすら写し、試験の際それを覚

えておけばそこその点数がとれる仕組みになっている。<sup>③</sup>

ということなのであろうが、教師が「教科書」収載教材を（その適否の吟味もなく）無批判に使用し、所謂「指導書」の言説のみを拠りどころとして国語教室に臨むとき、生徒の多様な読みや自由な読みは抑圧されていくほかない（無論、教師自身のそれも、である）。時に生徒にとって難解な「指導書」の言説を咀嚼せよとせずに開陳して「国語」を暗記科目たらしめている教師や、「指導書」に添付された「考査問題例」のまるごとの流用（下手にアレンジして題意のわからぬ問いにされるよりはマシだが）を専らとしている教師、共通範囲・共通問題を実施しても担当クラスの点数が低いと他クラスの担当者にまで教値の調整を求める（所謂「帳尻合わせ」に奔走する）教師などは、国語教室の構成員としてはもちろん論外である。

ここで小説に限って言うならば、教材選定の基準の第一点として、私はまず生徒たちが（ストーリー展開なり人物形象なりを）楽しむことのできる作品、所謂「国語嫌い」の生徒をも巻き込んでいける作品であるかどうかということをおきたい。もちろん、教室で一緒に読むとき、生徒たちだけでなく自分も楽しむことのできる作品であるということも重要である。生徒にウケる（何らかの感動を与える）ことは大前提だが、同時に、既に一度読了した私自身が彼らと一緒にもう一度読み返してもいいと思えるような作品を選びたい。

ただし、その作品が、折々の国語教室の情况<sup>⑤</sup>（クラスの成員たちが醸し出す雰囲気や集団としての成熟度、それまでに取り組んできた教材やその到達度、等々）を勘案して設定された学期ごとの授業計画（場合によっては年間授業計画）の一連の流れの中に、あるいは授業テーマや到達目標の中に、きちんと位置づける作品であるかどうかということの検討も同時になされねばならない。これが私の考える選定基準の第二点である。ちなみに、一九九四年度の高一普通科・国語Ⅰ「現代文」では、あくまでもこちらの心づもり程度のものに過ぎないのだが、《他者との関係性》と「個体（生命）」の尊厳<sup>⑥</sup>の発見<sup>⑥</sup>ということを年間授業テーマに据えた。

さらに第三点として、「指導書」のない作品をあえて投げ込むのは、教師もまた生徒たちと同じ地平に立って、彼らとともに作品の読みを紡ぎ出していくことが可能だからであり、また同時に担当教師間で指導案作りを通じて教材論議を巻き起こしたいという当該学年「現代文」チーフとしての私の思惑がある。

## 二

「会いたい」の初出誌は、『野性時代』（角川書店）一九九四年二月号である。そして、角川ホラー文庫『見知らぬ私』（一九九四年七月）が、綾辻行人「バースデー・プレゼント」、鷲沢萌「雨が止

鎌田敏夫「会いたい」の授業

むまで、篠田節子「陽炎」、清水義範「トシネル」、高橋克彦「幽霊屋敷」、松本侑子「晩夏の台風」、森真沙子「水の中の放課後」とともに、本作を収載する。同書に付された著者紹介は次のようになっている。

鎌田敏夫（かまた としお）

脚本家として「俺たちの旅」「男女7人夏物語」など数多くのヒット作を手がける。著書『恋愛前夜』『世界で一番ロマンチックな海』『ルージュ』『キス・フレンド』他。

授業のテキストには、『見知らぬ私』収載本文をワープロで打ち出してプリント化したもの（B4用紙縦・30字×35行×上下2段）を用いた。プリントと文庫収載本文との対応箇所（頁・行）、および「会いたい」の梗概を次に示しておく。

◎プリント1（47頁はじめ～49頁17行）

アシスタント的な仕事よりも中枢的な研究に携わりたいと考える真弓（電器メーカー研究所勤務）は、ボストンの大学への二年間の留学を希望し、二ヶ月前に渡米したばかりであった。

浩一（民間気象会社勤務）は、恋仲になって間もない時期に遠くへ行くこうとする彼女に不信感を抱く。自分のことを愛していないのではないかと。かくて、「両方の気持ちがいっしょにならないまま」二人は離ればなれになった。

先月電話で話して以来、既に十数日が過ぎ、浩一は彼女からの電話を待ちわびていた。ある夜、仕事を終えて彼が帰宅すると、留守番電話に聞いたことのある歌のワンフレーズが吹き込まれていた。歌以外にメッセージはなく、真弓のいたずらかと思つてはみたものの、(いま昼間であるボストンの部屋に彼女は不在のほずで)それを確かめるすべもない。次の日の夜も、やはり同じ曲のワンフレーズが留守電に吹き込まれていた。

◎プリント2 (50頁1行〜53頁4行)

翌日、会社に留守電のカセットを持参した浩一は、それが数年前にFMでよく流れていた沢田知可子の「会いたい」という曲であると音楽好きの後輩から知らされ、その曲の入ったCDを買い求める。帰宅して聞くと、「高校時代に恋仲であった男に会えなくなった女性が、切々と気持ちを訴える」歌であると彼には思われた。

その週末、彼が真弓に電話をして歌のことを尋ねた際、電話の向こうで一瞬の沈黙があつた。浩一は留守電に「会いたい」を入れたのが真弓だと確信し、はっきりものを言う普段の彼女らしからぬやり方が却って「気持ち強く表現しているような気がして」胸が熱くなる。しかし、彼女が強く否定するので、彼の心にわだかまっていた不信任感が再びわき上がってくる。

◎プリント3 (53頁5行〜56頁6行)

「きみはおれから離れたくて、そっちに行つたんだ」——浩一はぶつさらばうに言い放ち、受話器を置いた。その直後に電話のベルが鳴り、真弓だと思つた彼が受話器を取ると、「会いたい」のワンフレーズが「遙か遠くから響いてくるように」流れて切れる。慌ててボストンに電話を入れた浩一に、真弓は自分ではないときっぱりと告げた。

彼は大学時代の恋人だった小島恭子に電話をかけ、留守電の件を話して彼女に確かめる。恭子は卒業後彼と同じ大学の研究室に勤めていたが、職業として仕事を続けることよりも家庭に入ることを強く望んでいた。一方、結婚のことなど念頭になかつた浩一が、彼女の二度目の妊娠中絶を契機に逃げるように研究室を去つたのは、六年前のことである。その二年後、恭子は教授の紹介した男と結婚していた。

◎プリント4 (56頁7行〜59頁7行)

思いがけない相手からの電話に恭子は驚いた様子だった。電話の向こうで子供の泣き声が聞こえ、彼女は留守電の主は自分ではないと怒つた声で言つた。

三日後、浩一のもとに恭子から電話がかかってくる。彼女は「会いたい」が「死んだ人に呼びかける歌」であり、浩一には

歌の文句に思い当たることがあるはずだと告げ、電話を切った。そこで、彼は歌詞を読み返しつつ歌を聞くが、恭子の言葉の意味をはかりかねて再び彼女に電話をし、初めてこの歌の文句が自分の高校時代の恋人だった寺沢美知子との思い出と重なり合うことに気付かされる。二人は卒業間近につき合いはじめたが、卒業式を一週間後に控えたある日、美知子は交通事故で死んでしまう。

◎プリント5（59頁8行～62頁10行）

美知子と近くの海に二人で初めて出かけた時、浩一の「遠くへ行くなよ」という精一杯の口説き文句に「柏木くんこそ、遠くへ行かないで。私のそばで、ずっと生きていてほしい」と彼女は答えた。砂浜で初めてのキスを交わした二人は、また一緒に海へ来ようと約束する。

アルバムの中になった一葉しかない制服姿の美知子の笑顔も色褪せ、一生忘れないと思った初恋も十五年の歳月とともに記憶の彼方へおしやられていた。

◎プリント6（62頁11行～66頁14行）

高校時代の「淡い初恋の思い出」を遙か遠くのものにした二度目の恋である「恭子との強烈な思い出」。恭子は今は幸せに暮らしている。『会いたい』という電話の主が、真弓でもなく

恭子でもないとなると、浩一に思い当たるのは、死んでしまった美知子しかなかった。

翌日、部屋に戻った浩一は、繰り返し『会いたい』を聞いていた。突然誰かが部屋にいるような気がして、見回すと部屋の様子が朝出かける時とは違っていているようにも思われた。その時、電話が鳴り、受話器の向こうから「遙か遠くから聞こえてくるような声」で『会いたい』が流れてくる。

◎プリント7（66頁15行～70頁10行）

「美知子なのか！」——浩一は思わず叫んでいた。電話はゆっくりと切れ、それから一週間、電話はなかった。真弓からのメッセージもなく、彼は「やっぱり自分から離れたかったのだ」との思いをさらに深めていく。

週末の金曜日、同僚たちとうさ晴らしに出かけた浩一が帰宅すると、部屋の空気は暖かく、テーブルの上に花が飾ってあった。そして、いきなりラジカセから『会いたい』が響いてくる。奥の部屋に誰かがいると確信した彼がドアを開けると、灯のついていない部屋に白い洋服を着た女が立っていた。

◎プリント8（70頁11行～74頁1行）

それはポストンから突如帰国した真弓だった。いきなり切られた電話に、浩一が自分の愛情を信じていないと感じた彼女は

「もう一度ちゃんと自分の気持ちを話さなといけなと思う」と言い、ポストンで「会いたい」を何度も聞いていたことを打ち明ける。例の留守電の主は真弓だった。しかし、彼女は真剣な顔で問う浩一に、自分がそれを入れたのは一度だけだと答える。

◎プリント9（74頁2行〜76頁14行）

残り三度の「会いたい」は、結局、誰の仕業かわからぬままである。浩一は、恭子に電話で確かめたことや死んでしまった美知子のことを真弓に話した。真弓もまた、自分の恋情と嫉妬と屈託とを素直に語った。浩一が抱き続け、二人を隔っていた不信任は、ここで初めて拭い去られることになる。互いの気持ちを確認し合うことのできた二人は、「久しぶりにじっくりとしたくちづけ」を交わした。

◎プリント10（76頁15行〜78頁おわり）

浩一の着替えを待つ間、本棚の上にあったアルバムを見ていた真弓の目は一葉の写真に釘付けになる。彼女はマンションに着いた時、踊り場でその写真と同じ制服姿の美知子が「今日化」と声をかけて階段を降りていくのに遭遇したというのである。

三

授業は、プリント化した本文を最初にすべて配布して通読するのではなく、一枚ずつ配布して一時限につき一〜二枚の割で読解に取り組むという形態をとった。したがって、生徒たちは、最後のプリントを手にした時はじめて「会いたい」という作品の全貌を知るのであり、配布されるプリント一枚ごとに、主人公とともに彼をめぐる次なる現実に立ち会っていくことになる。

「ぼくは小さい字がきらいなので小説などは読まないが、授業でやったみたいにならず読むとどんどん先が読みたくなるものだ。小説とか絵がないものでもおもしろいんじゃないか」と阿部洋臣、「一枚目を読むとすぐに二枚目を読みたくなり、国語の授業で三枚目までしか進まず、続きは今度の時間という時などは、気になって気になって仕方ありません。でもその反面、次の国語の授業が楽しみになるので、それはいいことだと思う。この「会いたい」という作品はとても人をひきつける力があると思う。」（西尾和哉）といった反応はこちらが予期したところであり、次に引く生徒の感想は読み手の印象の順次的な変化のさまを素直に伝えていよう。

① 「会いたい」を読んで

赤井正史

僕は、この鎌田敏夫さんの「会いたい」という小説を読んで、

最初は浩一と真弓だけの恋愛小説だと思っていたけれど、次第に先生からプリントをもらっていくうちに、浩一と真弓だけでなく、真弓と付き合う前に付き合っていた恭子という女の人も出てきた。／この恭子は、浩一に二度も妊娠させられ、一度目は生まない方を選んだが、二度目は生むと言ったとき浩一がいい顔をしなかった。この部分を読んで、浩一はなんてあくどい男だと思った。／そのうち、最初に付き合っていた美知子が出てきた。このときの浩一はいい奴だと思った。／留守電にメッセージを入れたのは、美知子が浩一を思う気持ちがそうさせたと思う。

このような授業形態については、例えば、田島伸夫氏の次のような言説の中に、一定の示唆を求めることができると思う。

作品の世界は、文章を順次性に即して読むことによつて明らかになっていきます。順次性を大切にするとするのは、単に、文章が時間的・線条的なものだという常識にたっているだけではありません。まず通読して終わりまでいってから初めて考え出す場合と、中途で考えながら読みすすめていく場合とでは、作品理解に重大な相違を生じることがあるからです。(中略) 文学作品から文学の世界をつくっていく上で重要なのは、部分をしつかりつかみ、その積み重ねによつて作品の全体像をつく

つていく過程です。<sup>⑦</sup>

また、ついですが、この授業形態の奏功の一背景として、決まった曜日には必ず某漫画週刊誌を手にし、某曜日には必ず連続もののドラマを楽しむべくTVの前に座を占めるというかたちで、生徒たちが所謂「続き物」形式でその関心を次回(次週)へと持ち越すことに馴らされて、ということも踏まえておかねばなるまい<sup>⑧</sup>。それは確かに奏功の一背景ではあったが、反面、私が残念に思うのは、「待ち」の姿勢が出来ている(せいか)収載本を明示しても、図書館や書店でそれを手にする生徒は必ずしも多くないということだ。これは以前同じ形態で別の作品に取り組んだ際の実感でもあった。

授業の導入は、沢田知可子の歌う『会いたい』(作詞||沢ちひろ、作曲||財津和夫、編曲||芳野藤丸)を聞くことから始まった。生徒たちには五十字用紙を配布し、どのような状況が歌い込まれていると思うかを書いてもらったが、概ね「高校時代からつき合っていた恋人を亡くした女性が、死んだ彼に呼びかけている」歌ということに落ち着いた(蛇足だが、この曲は、今回の教材に取り組み間、毎始業時に流し、いわば「現代文」の授業のテーマ・ソングの役割も担うことになる。なお、次に引く『会いたい』の歌詞の冒頭部の記号①①は、引用者が私に付したものである)。

- ① ビルが見える教室で／二人は机、並べて／同じ月日を過ごした／すこしの英語と、／バスケット、そして／私はあなたと恋を覚えた
- ② 卒業しても私を／子供扱いたよね／『遠くへ行くなよ』と／半分笑って、半分 真顔で／抱き寄せた
- ③ 低い雲を広げた 冬の夜／あなた 夢のように／死んでしまったの
- ④ 今年も海へ行くって／いっぱい 映画も観るって／約束したじゃない／あなた 約束したじゃない／会いたい…
- ⑤ 波打ち際 すすんでは／不意にあきらめて戻る／海辺をただ独り／怒りたいのか、泣きたいのか／わからずに 歩いている
- ⑥ 声をかける人を つい見つめる／彼があなただったら／あなた だったなら
- ⑦ 強がる肩をつかんで／バカだなんて叱って／優しく Kiss をして／嘘だよって抱きしめていて／会いたい…
- ⑧ 遠くへ行くなど言って／お願い一人にしないで／強く、抱き締めて／私のそばで生きていて
- ⑨ 今年も海へ行くって／いっぱい 映画も観るって／約束したじゃない／あなた 約束したじゃない／会いたい…
- 作品を読み進めていく過程で私が心がけたのは、登場人物や生起

してくる事象に対して、私の感想や判断——例えば、「留守電に誰が入れたかわからん歌が録音されとったら気持ち悪いわな」、「この真弓の態度（プリント2）は、寝起きのせいもあるやろけど、やっぱり怪しいで」、「自分が恭子から逃げ出しとるから、この男は真弓の行動に不自信を持ったんやな」など——を語らないということすなわち、生徒たちが抱くであろう実感に私の言葉で形を与えないということであった。

かくて生徒たちは、プリント10に至るまで、浩一とともにいくつかの「謎」に出会っていく。留守番電話に「会いたい」を吹き込んだのは誰なのか、真弓は浩一のことを本当に愛しているのだろうか、誰が浩一に昔のことを思い出させようとしているのか、浩一の部屋に現れた白い服の女は誰か、……と。

#### 四

プリント10を読み終えた段階で、私の方から、

○ 結局のところ、二度目以降の「会いたい」の電話の主は誰だったのか。

○ 真弓が踊り場で会った制服姿の少女は誰だったのか。仮にその少女が美知子だとすると、彼女はなぜ浩一ではなく真弓に会いに現れたのか。



という問いかけをおこない、生徒たちには、自分なりの「謎」解き・人物評・感想などを三百字用紙に自由にまとめてもらった。彼らの三百字文のいくつかを次に掲出しておくことにする。

⑥ かんそう

山田哲也

一回目は真弓がかけたが、二回目からは美知子がかけたかと思う。真弓のかけた「会いたい」の歌の続きがわかった美知子はやっぱり幽霊なんだあ！と思う今日のごころ。／最後の方で美知子の幽霊が真弓に「今日は」と言ったと書いてあるが、あれは、美知子が浩一に忘れられないために何かしようと思った時に真弓が「会いたい」をかけてくれたから「これはいい口実ができた」と思ったのかなあと思った。しかし、僕は幽霊を信じない。もしほんとうにでたら恐怖するから。／この話は、最後をもっとちゃんと書いてほしい。とても気になる。

⑦ 浩一について

松田圭介

浩一はブレイボーイだと思う。さらに女に子供をおろさせておきながら別れて無責任なやつだと思う。そして最近もポストンへ行っている彼女もいる。いったい何人の女とつき合っているんだらうと思った。もう30歳を過ぎていくというのに、結婚もせず親が心配すると思う。しかしこういうタイプの男は、一度結婚してもすぐ別れそうな気がするので今のままでいいと

思った。だから高校の頃につき合っていたようにもっと素直な恋愛をすればよいのにと思った。制服姿の美知子はナゾのままである。

⑧ 会いたい

中西正則

最初は、真弓は浩一のことばかりでポストンへ行っただけだった。でも真弓が日本へ帰ってきた時、浩一にあつたはずら電話が心配で帰ってきたとわかって、真弓も浩一が好きなんだと初めてそのことにオレは気づいた。／しかし、オレは美知子のことが一番好きになります。やっぱり美知子も真弓といっしょぐらい浩一のが好きだったんだと思う。／それは真弓が浩一に会いたいという歌を流したように美知子も真弓と同じで会いたいを流したからです。

⑨ 会いたい

山室英生

僕は浩一は今まで本当の愛に出会ったことがなかったと思う。初めにつき合った美知子とは死に別れという最悪な結果に終わり、次の恭子との恋は浩一が美知子を失った悲しみを忘れるためにつき合っていたのだと僕は思う。そして真弓がポストンへ行き、二人の仲がおかしくなった。しかし真弓が浩一にかけた「会いたい」という曲が再び二人をひきつけたと思う。僕は美知子は事故にあつてからずっと浩一を見てたと思うし、美知子

は浩一に本当の幸せを見つけてほしいと思っていたのだと思う。真弓がポストンから浩一に会いにきた行為を見た美知子が真弓の前に姿をあらわし、「今日は」と言ったのは、これからも一生浩一といっしょにいて浩一と共に幸せになって下さいという美知子からのメッセージなのだと思う。

## ① 真弓の電話

藤本賢一郎

僕が一番気になっていることは真弓の行動である。なぜ最初に真弓はワンフリーズしか曲を入れなかったのだろうか。本当に真弓は一回だけしか入れていないのだろうか。もし、美知子が曲を入れたとして考えると美知子もワンフリーズしか入れていない。そんな都合のいいことが起こるわけがないと思った。

僕は真弓が全部入れたと思う。なぜ一回しか入れていないと言ったのかわからないけど、僕が思ったことは、真弓は日頃からはつきりともを言う性格だったから何回も入れたなんてはずかしくて言えない。だから、一回しか入れていないなんて言ったんだと思う。

## ② 俺はこう思う

真古典男

真弓は実は今でもポストンにいたのである。そして最後にきた真弓は美知子の幽霊なのである。そう考えるとつじつまがあう。浩一の家へ来た時、真弓らしくない事がいっぱいあった。

あれは美知子の幽霊なのであたりまえなのである。／そして、踊り場で「今日は」つていったというなどは私（美知子）が今でも生きているという事になると浩一はどう思うかを知りたかったからなのである。そしてこの事でちゃんと頭の中を整理してほしかったと思う。そして、ちゃんと真弓とつきあってほしかったのである。

彼らの提出した三百字文は、作品に対する満足感や、逆に作品のあつけないラストに対する不満の表明（感想⑥）をはじめ、浩一を不実な人物として捉えるもの（感想⑦）、あるいは死んだ美知子の想いに着目し（感想④）、浩一との対比でその純粋さを説くものなどに概ね大別できる。ただ、私にとって予想外だったのは、美知子に対する共感的論述が最も多かったことである。少数意見として、電話はすべて真弓のしわざ（感想①）で、踊り場で美知子を見たという発言も彼女の愛情から出た駆け引きだとするものや、浩一の幸せを願う美知子の霊が真弓に扮して彼の部屋へ現れ、恋の仲立ちを演じている（感想⑧）とみるものもあり、なかなか面白かった。

なお、先の私の問いかけに対しては、「二度目以降の電話の主は美知子」であり、彼女が浩一ではなく真弓に会ったのは「彼のことを託すため」だとするもの（感想⑨）が大勢を占めた。「なぜ真弓のとさだけそのようなことをしたのか不思議に思うが、僕はこう

思った。真弓はめっちゃ性格が自分に似ていたからほっておけなかったんだと思った。(鈴木晃英)、「美知子と真弓の浩一に対する、純粋な思いが、いっしょだったので、真弓に浩一をまかせようと思って最後のあいさつをしたと思う。」(吉塚信仁)などの生徒たちの言(圏点||引用者)が示すように、美知子が真弓とシンクロしうる要素はいくつかある。「ただ活発なだけかと思っていたら、学内の英語弁論大会で、シャープな英語をしゃべり抜」くような美知子と「日頃からはつきりものを言う性格」で「もつと高度な知識を身につけて、中枢的な研究」に従事することを望む真弓。二人は浩一と「恋仲になったばかりの時に遠くに行ってしまう」点でも共通するほか、

「私、あの曲を何度も何度も聞いてたのよ、ポストンで。あなたに会いたい、会いたいって思いながら」

というかたちで(いわば『会いたい』を媒介として)美知子の高校時代の恋を真弓は共有し、切られた一本の電話が気になって帰国するような真弓の一面な姿に美知子は同調していく。

実体としては登場しない(具体的には浩一の回想と真弓の発言の中でしか登場しない)美知子に対する共感が最も多かったのは、生徒たちが『会いたい』という歌を彼女の想いのこめられたメッセージとして受けとめたこと——「この作品のメインはやっぱり最後に

ある美知子の想いだと思います。それは、美知子はいまだに浩一が好きだということですよ。そのあられが沢田知可子の『会いたい』という曲だったと思います。」(鳥居南圭吾)——を示している。

しかし、だとすれば、「歌の文句は、そのまま美知子と浩一の高校時代のことだった」という「歌の文句」と二人の「高校時代のこと」との対応関係(歌詞①①は先に引用した沢田知可子『会いたい』の当該箇所を参照のこと)、

歌詞① バasketコートできびきびと走りまわっている姿が印象的だった。……学内の英語弁論大会で、シャープな英語をしゃべり抜いた。

歌詞② 「遠くへ行くなよ」／浩一も、美知子に言ったことがある。

歌詞③ 美知子は、……交通事故に遭ってしまったのだ。

歌詞④ 「また、海へ来ようね」／と、その時に約束をしたのだ。  
／「試験が終わったら、いっばい映画も観よう」

歌詞⑤ 怒りたいのか泣きたいのか分からずに歩いたのは、歌の文句のままだった。

歌詞⑥ 該当箇所なし。

歌詞⑦ 砂浜で、浩一は、美知子と初めてのキスをした。

歌詞⑧ 「柏木くんこそ、遠くに行かないで。私のそばで、ずっ

と生きていてほしい」

歌詞① 歌詞⑩に同じ。

をみると、歌詞③・歌詞⑥の対応箇所だけが美知子の側の現実ではなく、彼女を失った浩一の直面した現実となっていることが気になる（言うまでもなく、他の箇所は、おそらく歌詞④でさえ、美知子の側の現実や想いと確かに符合している）。歌詞③と歌詞⑥の主語が浩一だとすると、美知子から浩一へのメッセージであるはずの『会いたい』の歌詞が分裂を来すことになってしまっている。ともあれ、メッセージとしての一貫性を信ずるならば、歌詞③・歌詞⑥に対応する現実を美知子の側から捉え返しておかねばなるまい。

## 五

次の時限、いよいよ「会いたい」の読解の仕上げに入る。彼らから出された少数意見と多数意見を紹介した後、沢田知可子「会いたい」の歌詞を印刷したプリントを配布する。『会いたい』の歌詞と小説「会いたい」との相違点を問うと、生徒たちからは死んだ恋人が男女逆になっているという答えが即座に返ってくる。そこですかさず、「みんなは『会いたい』が美知子から浩一へのメッセージやと感じてるわな、けど、そうやとしたら、『あなた、夢のように死んでしまったの』って浩一に言うのは、何か変なんちゃうか？」

と問いかけてみる。確かにそうだ、という空気は教室に流れるものの、具体的な発言は誰からも出てこない。<sup>⑨</sup>

「はい、プリントら、出せ。……海でデートした時、美知子は『柏木くんこそ、速くへ行かないで。私のそばで、ずっと生きていてほしい』って言うたわな、この願いは叶うたんやろか？」

「美知子が死んでもうたんやから、無理やん。」

「そやな、けど美知子の側から言うたら、浩一は『速くへ行』ってへんのやろか？」

「浩一は美知子のこと、忘れてた……。」

「と、いうことは、ヤツの心は、美知子から……。」

「速くへ行ってもうてるー！」

さらに発問を続ける。「美知子っちゅうのは、どんな子やったかいな？」、「ほな、ええ加減なこの男は、彼女とつき合っとる頃、どんなヤツやった？」、「……ということとは、その頃の浩一は生き死にで言うたら、今もおんのかいな、おらんのかいな？」——「誘導尋問や！」の声を尻目に、高校時代の恋人だった美知子と現在の恋人である真弓の浩一に対する一途な想いがシンクロしていること、恋人に対して同じように一途でありえた高校時代の浩一が現在いわば「死んでしまっ」ており、このストーリーは浩一が「死んでしまっ

た」自分を取り戻していく過程でもある、という把握をおこなっていった。

浩一と真弓の「両方の気持ちがいしくりしない」のは、浩一の心の中に拭い去れない「不信感」があったからである。そして、その不信感はおそらく（浩一自身、気づいていないのかも知れないが）二度も中絶をさせた恭子のもとから自分が逃げ出してしまったことへの、ある種の罪悪感に根ざしていた。浩一が真弓と「しっくりとしたくちづけ」を交わすまでの過程は、その癒しの過程——したがって恭子による赦し、も用意されている——でもあり、恭子を含む登場人物一人一人が（「会いたい」という曲を媒介に）自身の「会いたい」気持ちに向き合っていくのである。

既にこの時限も過半以上は過ぎている。手早く（現代の「歌物語」を書くように）と題したプリントを配布し、以後の取り組みについて説明していった。生徒たちの手許には、このほか、（現代の「歌物語」を書く！ 構想メモ）、（現代の「歌物語」を書く！ 下書用紙）と題した二種類のプリントが渡っている。

国語教室における生徒たちと作品との出会いが、漫画やTVドラマとのそれ同様、専ら受信者としての享受を仮に常態とするにせよ、その出会いの意味を対象化し、敷衍していく作業は少なくともできはずだ（そんな作業でも、煉瓦を一つずつ積み上げるように練り

返しているうちに、ひょっとしたら作品との能動的な出会いといっ

た地平にやがて辿り着くことになるかも知れない。今回の（現代の「歌物語」を書く！）を、とりあえず私はそう位置づけたいと思うし、このことはまた、生徒たちが受信し享受した所謂「自分の好きな歌」を用いて発信していく作業でもある。

最後に、今回の鎌田敏夫「会いたい」をめぐる授業の全容をあげておくならば、担当二クラスとも、概ね、

第一時限目 五十文字文、プリント1の読解。

第二―七時限目 プリント2―9の読解。

第八時限目 プリント10の読解、感想文（三百字文）。

第九時限目 読解のまとめ。歌物語に関する説明、構想メモ用紙および下書用紙配布（自分の好きな歌を自由に選び、その歌詞を次時限に用意）。

第十時限目 「歌物語」下書作業（清書は次時限に提出）。

というものであった。紙幅の都合もあり、九―十時限目の（現代の「歌物語」を書く！）の詳細は割愛せざるを得ないが、この作業と生徒たちの手になった「歌物語」については、別稿<sup>⑫</sup>で取り上げることとした。

本稿に書きとどめた取り組みは、年間の授業計画の中でみれば、ほんの途中経過に過ぎない。というよりもむしろ、私たちの国語教

室における（ひいては学校現場における）営み自体、常に途中経過であると思ふべきなのかも知れない。それをルーティンに感じてお決まりのパターンでこなすようになったとき、私たちは、対外的にはともかく実質的には国語教員として終わってしまふのではないだろうか。確かに「たかが現代文の授業！」ではある。それでもなお、作品をよさんでの生徒たちとのせめぎ合いの中で、彼らの現在あるいは私自身のそれと不断に「会いたい」と私は思うのである。

## 注

① 一九九四年度の私の担当科目およびクラスは次の通りであった。

高一普通科・国語Ⅰ「現代文」（三単位）

四組（男子45名）・五組（男子44名）

高一普通科・国語Ⅰ「古典」（三単位）

七組（男子45名）・九組（男子44名）

高二普通科・必修選択「古典a」（四単位）

五・六・九組（男子43名）

② このときの授業の詳細については、拙稿「山田詠美「風葬の教室」の授業をめぐって——高一国語・現代文——」（『研究紀要』第30号、大谷中・高等学校、一九九三年十二月）にまとめている。

③ 「共通問題」（解放教育研究会「学校のことは 教師のことは」、東方出版、一九九四年）。

④ かつて私は、高三普通科・「現代文」（三単位）の授業において、「この作品の主題は、私にはわからない」と導入時に宣言し、最終的に「自分はこの作品から何を読み取ったか」を生徒たちに自由に論じてもらう

（結局、私の側から作品の主題についてまとめることはしない）という取り組みをおこなったことがある。実際のところ、取り上げた作品は様々な解釈を許容しうるものだったが、彼ら一人一人の呈示した読みは、決して単なる思いつきに墮することなく、しっかりとしたものであった。

この授業の詳細については、拙稿「安部公房「赤い藪」（高三・現代文）の授業——教師が作品の主題を語らないということ／生徒たちの（声）を聞く——」（『国語教育雑誌』第20号、京都府私立中学高等学校国語科研究会、一九九四年三月）にまとめている。

⑤ 後掲（注⑥）のごとく、一学期の後半に「風葬の教室」を急遽（実は夏期休暇中から大江健三郎の作品を検討していたのだが）据えたのは、九月に入って、私のホームルームである五組に、いまだ潜在的ながらいじめや対立をやがて生じうるような空気の軋みを感じたこと、同じ頃、私の高一担当四クラスのうち、四組や七組で既にそれが問題として顕在化していたことによるものだ。そのことを人権学習やロング・ホーム・ルームの時間に徳目的に扱う方向とは別に、作品を通じて生徒たちに考えてほしいと思ったからである。

ちょうど「風葬の教室」への取り組みの最中、愛知県でいじめによる中学生の自殺事件が起ころ、生徒たちは作品世界をよりリアルに、身近な問題と重ね合わせつつ、捉え返していくことになる。

⑥ この年間テーマに基づいて取り組んだ教材は次の通りである（ただし、教材の選定は学期ごとにおこなった）。

## 一学期【中間考查範囲】

丸山健二「マラソン・ランナーは孤独か」

◎山田詠美「蟬」（※初発・最終感想文各一篇）

## 【期末考查範囲】

芥川龍之介「羅生門」(※「続編」創作一篇)

野村雅一「身体像の近代化」

二期【中間考査範囲】

◎鎌田敏夫「会いたい」(※感想文・「歌物語」創作各一篇)

日野啓三「私にとって都市も自然だ」

【期末考査範囲】

◎山田詠美「風葬の教室」(※登場人物評・感想文各一篇)

三学期【学年末考査範囲】

中村雄二郎「目に見える制度と見えない制度」

志賀直哉「城の崎にて」(※感想文一篇)

右のうち、◎印を付したのが自主教材で、それ以外は使用教科書『新訂国語一 現代文・表現編』(第一学習社)に収載されたものである。また、※印を付した教材では、それぞれ括弧内の内容で生徒たちに書く作業を課している(これらは各学期評定の一―二割を占める。「風葬の教室」の感想文は冬期休暇明けの提出で、三学期の評定対象とした)。

なお、山田詠美「蟬」の授業の詳細については、拙稿「山田詠美を国語教室へ――高一国語(現代文)・『蟬』の授業――」(『日文協 国語教育』第27号、日本文学協会国語教育部会、一九九五年十一月)にまとめてある。

⑦ 田島伸夫「文学の読みで何を大切にするか」(『国語教育・中学の文学』、あゆみ出版、一九七六年)。

⑧ このことは、大河原忠蔵「なぜ、いま、教材研究か」(『国語教材研究講座 高等学校現代文』上、有精堂、一九八四年)にも既に指摘がある。大河原氏は、「二つの教材をどう教えるかを研究するとき、順序と立場の置き方を、生徒の意識回路をじゅうぶんに考慮した上で、設定すべきだ」という「教材研究の現代化」の観点から、「第一に考えなければ

ならないことは、生徒がテレビに慣らされた意識で授業にのぞんでいるという点」にあり、それは彼らが「映像に親しんでいるということのほかに、テレビの構成の骨組みが、認識の順序として、それがもつとも自然なものとして浸透していることである。」と説く。それゆえに「このことを無視して、以前とすこしもかわらない順序や、知識のとりあげ方で授業を進めれば、生徒はつまらない授業だと判断して(その判断は授業の導入でなされる)、そっぽを向く」ともなる。

⑨ 以後の発問は、「美知子が出てきたのは、昔に浩一に言った、私のそばですつと生きていてほしい」というのが、自分が死んでかなわなくなつたからかも知れない。(川崎良平、「美知子は浩一が恭子にひどいことをしたことは知っていたのかと思う。もし知っていたなら昔の浩一、と今の浩一の変わりようにショックを受けたに違いないと思った。)(松本慎哉)という、三百字文における生徒たちの指摘(圏点⇨引用者)を敷衍したものである。

⑩ このプリント(現代の「歌物語」を書こう!)の内容は、次の通りである。

▼鎌田敏夫の「会いたい」は、沢田知可子の『会いたい』という歌をテーマとして紡ぎ出された小説だった。▼実を言うと、こういう物語の作り方は、決して新しいものではない。なんと、みんなが知っている古典「伊勢物語」なんかも、その一つ一つの物語の多くは作品中に織り込まれた歌をめぐるものとして作られているんだ。▼ここで、少しカタイ話をおこよう。例えば、みんなの古典編の教科書に載っている大伴家持の歌は、次のようになってる。

三年春正月一日、因幡国の庁にして、葉を国郡の司等に賜ふ宴の歌一首

新しき年のはじめの初春の今日降る雪のいや重け吉事

▼傍線を引いた部分を歌の「詞書」と言う。詞書っていうのは、歌の詠まれた事情や対象などを書き記したものだ。この部分が長くなくて物語化されたのが、「歌物語」と呼ばれる作品であると考えてもらってもいいと思う（かなり大ざっぱな説明ではあるけどね）。

▼さて、そこで、今回のキミたちの取り組むべき課題だが、自分の好きな歌を一曲選んで、その歌をめぐる物語を書いてもらおうということなんだ。次の授業までに、自分の選んだ歌の歌詞をコピーまたは書き写して置くこと。その際に、作詞者・作曲者もチェックしておく（例えば、「会いたい」ならば、「作詞〳〵沢ちひろ、作曲〳〵財津和夫、編曲〳〵芳野藤丸」となっている）。▼作品の字数は七百字以上千二百字以内とする。短い物語なので、鎌田敏夫「会いたい」のように歌詞を文中に引用することはせずに書いてほしい。▼物語の題名は、歌の題を取って、例えば「さよなら人類（たま）」というかたちにし、カッコ内には歌手の名前を入れることにする。

⑪ 前者（構想メモ）の内容は「(1)選んだ歌、(2)歌手、(3)作詞者・作曲者・編曲者、(4)歌詞（コピーを貼り付けるか、書き写すこと）、(5)登場人物（だれが、だれと）、(6)場面（いつ、どこで）、(7)事件（何をして、何が起きて）、(8)結末（どうなった）」というもので、後者（下書用紙）は原稿用紙である。

⑫ 拙稿「現代の歌物語を書く——鎌田敏夫「会いたい」の授業（二）——」（『研究紀要』第32号、大谷中・高等学校、一九九五年十二月）。